

社会福祉法人 檸檬会

レイモンド川崎保育園

「科学に携わる子どもと

その周りにいる大人の成長」



目次

1. はじめに

「科学する心を育てる」についての考え方と取り組みのテーマ

2. 擬態的な子どもの姿に基づく実践の報告

3. 実践の考察

事例1 「泡スライム」(職員：木本、加藤) 1歳児～5歳児対象 (2020年5月1日)

事例2 「片栗粉」 (職員：小林、遠藤) 1歳児～5歳児対象 (2020年5月19日)

・(2-1) 初めての出会い(粉の特性)

- (2-2) 1, 2歳児の粉との出会い 片栗粉、重曹、泡(乳児の反応)

事例3 「変化する色」～バタフライピーと檸檬～(職員：三枝木、木田) 幼児対象 (2020年6月11日)

事例4 「水道」～水『じゃぐちをあけると』～(職員：木田) 3.4歳児対象 (2020年6月19日)

事例5 「ひかり」(職員：小林、加藤、木本、三枝木) 1歳児～5歳児対象

・(5-1) Kさんと『ひかり』1歳児時期～光との出会い～(2018年9月)

・(5-2) Kさんと『ひかり』2歳児時期～光を通して友達という共感できる仲間との出会い～

(2020年3月吉日)

・(5-3) 4歳児光を利用して(2020年5月)

事例6 「ひかりの探検」(職員：三枝木) 4歳児～5歳児対象 2020年5月25日

・(6-1) 「シンクに反射させてみよう」～水の泡ができた!

・(6-2) 6-1の事例を通して職員で振り返り

4. 考察に基づく課題と今後の方向性や計画

1. はじめに～「科学する心を育てる」についての考え方と取り組みのテーマ ～

本園は、川崎駅から徒歩8分という集合住宅のビルの3階に位置しており、園庭がなく必然的に室内で過ごすことが多くなるため、基本的には戸外へ出る活動を日々取り入れるようにし、「散歩」といった活動を主として行っている。地域の特徴として30%の子どもが日本人ではなく、ハーフまたは、日本人以外の両親をもつ子どもたちが在籍している。

日々の保育は、保育理念、法人理念、保育方針の下、乳児では育児担当制を取り入れ、人との愛着や信頼関係を大切にしながら日々の小さな変化にも、大人がより早く気が付けるよう過ごしている。

幼児は子どもの主体的な活動を自発的に行えるように、幼児コーナー保育を取り入れ、日々子どもたちからの発見や気づきを大切に「なんだろうのその先へ」といった法人のコンセプトを基に保育を行っている。

保育理念

- ・人命を愛する心
- ・自然と共に生きる心
- ・想像する心

保育方針

- ・子ども一人ひとりの育ちに寄り添い、それぞれの生きる力を育む
- ・様々な体験を通して、しなやかな身体と豊かな感性を育む
- ・人との「つながり」、社会との「つながり」を育む

更に子どもにとって「なんだろう」「知りたい」と、自分の知っている世界とは違う最初の違和感や発見は、後の新たな世界の扉を開く最初の鍵だと捉えている。

そして、子どもが物事の変化や不思議に気が付いた際に近くにいる大人の保育者の対応により、その後の展開や発展に大きく影響していくことを意識して保育を行っている。

丁寧にその子に合わせた対応をしたい、そっとその気持ちに気が付き寄り添いたいと願いながらも、そのタイミングや個々に合わせた対応は難しくもあり、正解は一つではないと理解しながらも日々の保育の中で葛藤しながら保育を行っている。

子どもが見つけた「なんだろう」のその鍵をただの出来事として通り過ぎていくのか、それともその気持ちに寄り添い「どこのかぎだろう」「どうやったら開くのか」など、共に掘り下げていくのかでは、その子自身の知ろうとする意欲やその後の可能性に影響をもたらすのではないかと考えている。興味関心といった探求心に関わり、知的好奇心として学ぼう、知りたいといった意欲に大きく作用するのであろう大人のかかわりは、常に子どもたちが自発的に行い考えられるよう意識しなければならないと考えている。

そこで、当園では、乳児期より育児担当制を行い、そこで培った大人への愛着関係を人への信頼のベースとして相手に「伝えよう」安心して「表現してみよう」といった思いにつながっていくように思いを込めている。

そして、近くにいる保育者自身が、常に子どもたちの気持ちの変化に気が付き、その子のその気持ちや思いに共感することで、さらに子どもたちは安心して相手へ伝える楽しさや意欲を持ち「ワクワクする」体験することによって積極的になれると考えている。

それには、保育者も子どもと一緒に夢中になり楽しむ姿勢、気持ちが大切であり、その気持ちこそが「科学する心」を育む、大切な一歩ではないかと捉えている。子どもにとって身近な大人が最初の理解者となり、「これでいいんだ」「こうしてみよう」と自己肯定を高められるからこそ、自信を持ち、自尊心へとつながっていくのではないかと過程を大切に日々の保育を行っている。よって自身も感動し探求してみようといった大人の「本気になって楽しむ」その姿勢が、相互作用となり、子どもたちにとって刺激となり、同じ空間で同じ時間を過ごすことが何より「科学する心」を育てていく基盤となると本園では考えている。

一人ひとりの子どもの小さな変化に大人が興味を持ち、心が動いたその瞬間の思いに気が付き、そっとさりげなく思いに寄り添い、いつでも子どもに向き合い大事な時期を見過ごさず保育を行いたいと願っている。この論文では、日々の保育の中にある子どもと科学との出会いと、その願いを持ちながら子どもの近くにいる大人の葛藤を記していきたい。

『子どもが飛びついてきた。あっと思う間にもう何処かへ駆けていってしまった。その子の親しみを気のついた時には、もう向こうを向いている。私は果たしてあの飛びついてきた瞬間の心を、その時ぴたりと受けてやったであろうか。それに相当する親しみで応じてやったろうか。

後でやっと気がついて、のこのこ出かけていって先刻はといったところで、活きた時機は逸し去っている。

埋めあわせのつもりで、親しさを押しつけてゆくと、しつこいといったような顔をして逃げていったりする。

其の時にあらずんば、うるさいに相違ない。時は、さっきのあの時であったのである。いつ飛びついてくるか

分からない子どもたちである。』飛びついてきた子ども／倉橋惣三

2. 擬態的な子どもの姿に基づく実践の報告

3. 実践の考察

事例 1

泡スライム（職員：木本、加藤）1歳児～5歳児対象5月1日

以前職員が研修で学んだという、ベタベタと手が汚れることを苦手とする子どもでも感触遊びを楽しめるという「泡スライム」に着目した。「泡スライム」をあらかじめ手作りしておいた。すると反応を示した5歳Kさんと、4歳児Tさんがいた。

「興味を持った子どもとともにやってみよう」という思いで、最初は1人2人と周りに集まり興味を持ったやりたい子をきっかけにはじめていくと、次第に子どもたちが集まり半分以上の子が興味を示した。活動のきっかけは保育者であり、興味を持った子から始めたが、次第に人数が増え参加していく。薬剤（ホウ砂）を使用するため、大人が作製するが、変化する様子を見て割合を決めていくのは大人と共に行い、「実験」を楽しんだ。反応として、

- ・上記の様子を見ていた2歳児が数名いたが実際には泡へは触れたがらなかった。
- ・大人が触る様子を見て触る子が多かった。
- ・いつまでも同じものを触り続ける中で、「違う色がいい」など要望も出てきた
- ・5歳児Kさんがお肉など反応を示すなどがあった。

※コロナを考慮しタライには一人ずつの手を入れ触る。



図1:当日のドキュメンテーション



図2:自宅でも出来るように作り方を発信した

考察

今回の活動のきっかけは、保育者同士で話し合いお互い研修で得た「これを行ったら子どもたちがどんな反応をするか」「汚れることへ苦手な意識のある子も経験してもらいたい」「どうしたら楽しいと思ってもらえるか」「変化の楽しさや感触の不思議さを経験してもらえるきっかけを与えたい」という保育者の思いや願いからの発信だった。職員が「泡のスライム」を用意している様子や、実際に手にして遊んでいる他の幼児の様子を見て、近くへ寄っていった乳児の数名も、最初は興味を持ったものの、実際に触れると触ったことのない未知の「違和感」として感触を拒否した子もおり、その後用意した「小麦粉」はいつも使い慣れているためか安心して座って夢中に取り組んでいた。

このことから、予想していた感触と実際の感触とでの違いや初めての感触に驚いたことに乳児は「怖い」と認識し、不安につながっていたのではないかと推測される。

乳児期の発達においては、自身での気づきはあるものの、より身近な大人が興味関心を持つことに関して、子どもは興味を持つことが分かった。そして、心の動きとして、大人があらかじめ予測していた「感触や初めてのことへの関心」よりも「不安や驚き」のほうが今回はより強かったように感じた。しかし、その後再び興味関心を持ち、指一本で恐る恐る触ろうとするなど、身近な存在の保育者や友達が安心材料になり、初めての「ワクワク」とした出会いへ一歩踏み出せたのではないだろうか。

このような事例から、乳児期における「未体験」は、保育者の安心する存在が大きく作用することが考えられ、周りの大人や自分より経験のある友達（幼児）が、対象児の不安にどのように寄り添っていたかがキーワードとなるのではないかとこの事例で考えられる。

事例2 「片栗粉」 （職員：小林、遠藤）1歳児～5歳児対象 2020年5月19日

【2-1】初めての出会い（粉の特性）

コロナで在宅勤務になった職員が保護者や子ども向けに動画を配信する。

内容は、『片栗粉』を使った水との比重の割合で粉の感触が変わっていくという変化を楽しむものだった。片栗粉と水を合わせた液体の容器にゆっくりと手を入れると、すんなり手が入っているのに対し、素早く手を入れると反発し入らない。また、ぎゅっと手で液体を握み力を入れると個体のように固まり、反対に手を開くと液状になりドロドロと手のひらから零れ落ちていく。といった粉の特性を利用した不思議な感触を実験の映像として紹介していた。その職員の動画を、幼児数名で見ると、同じものを「作りたい!」「実験したい」との声が上がった。そこで、用意していた片栗粉3袋を使用して片栗粉の感触遊びを行った。

ブルーシートを敷き机の上に置かれた小麦粉の袋と片栗粉の袋。「これなにかわかる?」と聞くと、「それは小麦粉の袋だよ!」と答える4歳児Tさん。

その後「何に使う粉か分かる?」と聞くと「ケーキとかパンにも使うよね!」と5歳児Kさん。「じゃあ片栗粉は?」と保育者が問うと、「うーん」と悩み答えが出せずにいた。

そこで二つの粉を洗面器の中に出し、比較できるように子ども達の前に置いてみた。二つを見比べて、「なんか色が違うね」との反応があり、他の子も「ほんとだー」と夢中になって見比べていた。3歳児Kさんの「触ったらいっしょかな?」と言う疑問から少しずつ触り始める子ども達。「なんか片栗粉の方がぎゅうってする」と気付きの声。「なんでだろう」と不思議そうにする子ども達の反応があった。

見た後は一人ひとりの容器を用意し遊び、握って手を開いたら形が変わる事に気が付いた4歳児Tさん。「先生！みてみて！ほら溶けちゃったよ」と不思議そうに、夢中になって遊んでいた。5歳児Kさんは、大人が分量を調整する様子を見ていたからか、黄色に着色したもので遊び、黄色に赤の着色を足すことで色の変化があることも気付き「チーズみたいだね」と何度も楽しんでた。最後はたくさん粉を使って、タライに同じものを用意し、足で感触を楽しんだ。「つめたいね」「足がいなくなってくよー」とまずは足を置くだけで楽しんだ子ども達。その後は保育者が手を繋ぎながらその場で足踏みをした。「え？(タライの外に)飛んじゃうよ」と心配そうな4歳児Tさん。保育者が「大丈夫だよ。」と声を掛けると嬉しそうに足踏みを始めた。最初の感触の違いに声にならない驚きが表情に出ていた。終わったものを個人で袋に入れると「これ、置いておいたら固まるのかな？」と

5歳児Kさん。午睡後に見るのを楽しみにしていた。午睡後に水と片栗粉が層になり分離していることに気が付いた4歳児Tさんは自宅に持ち帰るといい、持って帰った。

翌日、4歳児Tさんが母親と登園時「昨日のあれ、ドローとして面白かったね。握って手を離すとなんか面白い感触になっていたんだよね」「あれは、澱粉がくっついてドローとなったんだよね」と母親と家庭で楽しんだ様子がうかがえた。片栗粉は以前に保護者とのかかわり(3、4歳児が乳児だった際に親子での交流会で片栗粉遊びを行っている)で携わっていることがあった。



図3:保護者へ向けたドキュメンテーション

【2-2】1. 2歳児の粉との出会い 片栗粉、重曹、泡(乳児の反応)

・Mさんは動画や最初の粉の時点では興味を持って幼児さんに混ざっていた。

粉に水を混ぜてドロドロになってきた頃、何となく離れていった。

・小麦粉粘土はクラスの活動でおこなったことがあった事を知っていたので作ってテーブルに置いておくと自分から椅子に座って遊び始めた。

・MIさんは何となくその場の雰囲気に合わせて近くにいたが、触ろうとするなど積極的な面は見られなかった。すぐに違う遊びの方へいっていたが気になる様でチラチラ見ていた。

そこで、保育者が近くまで持って行ったが、嫌がった。

Mさんが「何かやっているよ」と伝えるとMIさんが覗きに行き、「やるー」と椅子に座り始め遊んでいた。その後のクラスでの活動では、この粉の活動をきっかけに、重曹やあわを取り入れた遊びを展開している。図5重曹では、重曹の粉とレモン汁が少なかった為、泡立つ様子があっという間に消えてしまった。少しずつ垂らすことで、長い時間泡立つ様子を楽しめたが、一気にレモン汁を入れてしまったのですぐに泡がなくなった。泡を触って感触を楽しんでいたり、泡だった後の重曹とレモン汁が混ざりトロトロになった状態で手でかき混ぜて遊ぶ姿や匂いを嗅ぐ姿も見られた。



図5:重曹との出会い

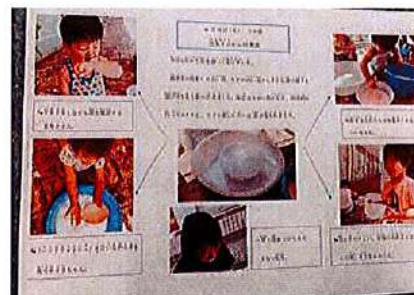


図4:泡との出会い

考察

・今回の活動の発端は、「コロナ過の中で、保護者支援、家庭支援の一つとして何かできないか」という思いから、一名の保育者が自らの得意分野を生かし、動画を作成発信したことからだった。

家庭と園とで自粛中離れて過ごす子どもたちとの共通する遊びの発展へとつながったが当初からこの活動への発展は見込んではいなかった。いつも園生活を共に過ごし、安心できる保育者が画面越しで行ったことで、知らない事へも興味関心をもち「実験」という変化を知り、自分たちでも「行いたい」といったワクワクした思いにつながっているように見えた。動画と同じことを行える楽しさやワクワクとした感情が今回の活動へとつながったように思える。以前に現3歳児、4歳児は乳児期の1・2歳児の時に保護者と共に「片栗粉」でのこのような特性を楽しむ活動を行っている。

その時には、怖がって行わなかった子ども実際に保護者が共に楽しみ、「この感触が懐かしい。昔遊んだ遊びですね」「感触が不思議だね」と保育者と保護者が活動や会話を楽しむ様子を見ている。今回の活動は、そのような経験もあり初めての感触へも興味を持ち、動画という可視化されたものをみたため、初めてで不安の大きな子ども見通しをもって活動を楽しめていたのだと考えられる。

このように、保護者を巻き込んでの活動は、子どもにとっての「なんだろう」といった探求心を園の中だけにとどまらず、いつでも無限に広げていける一つの方法だと考えられる。

そして、いつでも安心して興味関心を深めていけるには、共感してくれる大人の存在は、不可欠であり、大切で必要な要素の一つだと感じる事例であった。

そして、今回は同時に、この時に気を付けなければならないこともあると感じた。それは、子どもにとってより近い大人の存在が活動に対して興味関心を抱くことで、その活動自体が注目され、時として、大人の期待に重なり強制的な「やらなくてはならない」といった雰囲気になりやすくなるということだ。そうなることだけは避けたいという思いから、今回、保育者の一言や投げかけはきっかけの一つにもなるが、子どもが大人の期待を感じ応えるような保育の展開にならないことへは細心の注意を払ってきた。

具体的には、やりたいといった児のみ触れる、終えるタイミングは個々に合わせていく。水の量などは大人で決めず子ども自身が自分で決めて行う。等である。

なぜならば、その活動はいつでもやめることができ、本人たちの主体的な思いで行うことができるからこそ、「やってみよう」ワクワクといった探求心につながる。ということを経験で感じたからである。乳幼児期における保育者としてのかかわりとして、何かを教え込むのではなく、大人自身が感じることを「共感する、表現する」ことが根本にあることで、こうした周りの大人のかかわりにおける子どもの興味関心に関わる影響を大切に考えていきたいと思った。子どもたちの成果は、いつも生き生きして新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれていることを知った。

「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固くしめています。子どもたちが出会う事実の一つ一つがやがて知識や知恵を生み出す種子だとしたら、様々な情緒やゆたかな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌です。幼い子供時代は、この土壌を耕すときです。美しいものを美しいと感じる感覚、新しいものや未知なものに触れた時の感激、思いやり、憐れみ、賛嘆や愛情などの様々な形の感情がひとたび呼び覚まされると、次はその対象となるものについてもっと知りたいと思うようになります。そのようにして見つけ出した知識は、しっかりと身に付きます。消化する能力がまだ備わっていない子どもに、事実をうのみにさせるよりも、むしろ子どもが知りたいがるような道を切り開いてやることのほうがどんなに大切であるかわかりません。参考文献：(1996)レイチェル・カーソン、『センス・オブ・ワンダー』 新潮出版 24-2

事例 3

「変化する色」(職員：三枝木、木田) 幼児対象 2020年6月11日

～バタフライピーと檸檬～

乳幼児の頃から色遊びを食紅や絵の具で行い、色の変化を楽しんできた4歳児が試験管に興味関心を持つ。そこで、テラスで水遊びや表現活動を行い遊んでいた横に机を出し、試験管、バタフライピーを抽出した液と檸檬汁をそれぞれ紙コップに用意しておいた。

Iさんが初めに試験管に興味関心を持ち、触りたがっていた。「入れてみたい」と試験管にバタフライピーを適量入れることを楽しんで行っていた。試験管のなかに紫色のバタフライピーを入れ、その後、檸檬の汁を入れると化学変化により色合いが変わり青くなる。試験管や色の変化、初めての液体(バタフライピー)に接したときに子どもたちはそれぞれの反応を示し興味を持っていた。Iさんは、比率に驚きどうして色が変わるときに色合いが檸檬の量により、変化があるのかと自分で確かめるまで何度も試していた。

そして、色の「変化」に気が付き興味を持ったIさんにTさんは興味を持ち、その様子を共に喜び「すごいじゃん!」と見入っていた(図6) Iさんは慎重に各試験管へ同じ量入れ、変化することを楽しんでいた一方Tさんは試験管ギリギリのこぼれないラインまで入れることが楽しいようだった。そして「浮いている!」と水面ギリギリが盛り上がる『表面張力』に興味を持っていた。(図7)



図6: Iさんに興味を持つ



図7:表面張力に気が付く



図8:同じように量を入れてみようとする

考察

2名の4歳児がそれぞれ同じものへ興味を示すがその興味関心が必ずしも同じ反応ではなく、個々に興味関心を持つ視点、捉え方が違うようだった。

保育者の願いとしては、元の色が変化する様子に興味をもってほしいと願い計画を立てていたが、当該児としてはそれぞれが楽しいと思えることにのみ反応し楽しんでいた。

Tさんは、友達のしていることに興味を持つが、実際に自らが液体の空け移しを行ってみると表面張力に興味があったようだった。いかにこぼさないか、ギリギリのところまで水の量を止められるかといった様子を集中して繰り返し行っていた。(図8)

この活動を見守っていた保育士は、Iさんの行為に興味をもったことから始めたことが思いもよらない展開へ興味に向いたことに戸惑いを持ったが、それを強制的に本来の色の変化といった目的に進路をまた変えてしまうこ

とは、本児の気持ちを尊重してない事なのではないかと、じっとその行為を見守ることにした。その結果、Tさんが『表面張力』に気が付くことができ、感動と科学への興味につながっていったのだと考えられる。

Iさんは、色の変化を感じたことで友達への共感や大人と共に変化の色を楽しんでいた。(図6) このようにそれぞれの子どもの反応は違って当たり前だということ、また、個々の違った反応であっても興味関心を持った気持ちにそれぞれ周りに入る大人が寄り添うことこそが、科学をする心の第一歩へのつながりになるのではないかと感じた事例であった。子どもたちにとって興味関心のきっかけとなるこの心の動きをいつでも察知できるような心の持ちようがとても大切な大人の役割であると感じる。

『科学心の満足は、科学的知識を学ぶことにも得られるものであるが、それよりも、科学的に心を働かせてゆく処に、一層の興味があるといえる。』倉橋惣三「少年は科学者」

事例4

「水道」(職員：木田) 幼児対象 3, 4歳児対象 6月19日

～水「じゃぐちをあけると」～

子ども達が好きな絵本「じゃぐちをあけると (しんぐうすすむ作)」。

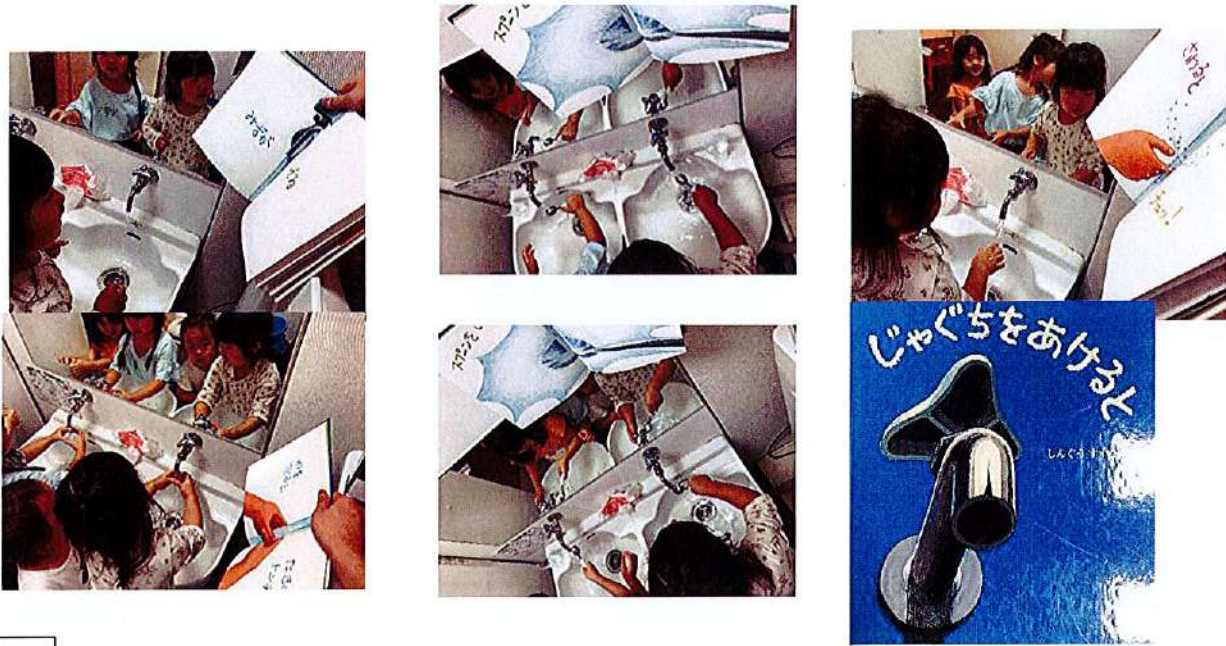
日々の生活で保育者に「読んで!」と持ってきた3歳児のKさん。読み聞かせをしていると、絵本の場面に合わせて、一緒に手を動かすKさんや4歳児のTさんの姿があった。そこで、「やってみる?」と問うと、KさんもTさんも驚いた様子だった。興味はあるが、「蛇口で遊んでいいのか」という葛藤が垣間見られた。その部分を汲み取り、「実験だよ! 本当に絵本の通りになるかの実験!」と言うと、途端に顔が明るくワクワクドキドキの様子で「やる!!」と答えた。その際には、3歳児のYさん、4歳児のMさんも加わり5人で行った。自園の蛇口が絵本に登場する蛇口と形態が同じことに興味関心をもっていた。

水道へ行くと「一緒だね」と子ども達同士で盛り上がっていた。保育者が子ども達に見えるように絵本を持ちながら読み聞かせるようにページをめくり、試していく。

いつも使っている水だが、何か少し特別な気持ちだったのだろう、水に触ってMさんが「つめたい!」と言った。それにつられるようにYさんも「つめたい!」と楽しそうだった。「コップにあてると すべりだい」のページでは、Kさんが「見て見て! こうすると大きくなるよ!」と、コップの向きに着目していた。保育者が「なんで大きくなるんだろう」と言うと、Tさんが「だってね、手で叩くと水が広がるから、何かをあてると広がるんだよ!」と答えた。次は「うえにあてると みずのふうせん」のページだ。しかし、絵本のようにはいかなかった。絵本と同じ場所に水をあてているがなかなか「ふうせん」ができない、Tさんが同じようにやり「こんなかんじかな?」と呟くがYさんが「ちょっとちがう」と答えた。そこでMさんがコップの下の部分でも試してみたが「いけない」と、もやもやした気持ちになりかけていたらKさんが、「コップが違うんじゃない?」と言った。保育者もそれを聞き、「あ! たしかに! 水は一緒でもコップが違うからかな」と答え、「ふうせん」は保留になった。更に、スプーンや、フライパンを使うページがあった。「道具」にあてると水が変化することに興味や関心が出てきた子ども達は、色々なことを試したくなっていた。Kさんが呟いた。「先生、あれでもやっていい?」近くにあった、おままごとで使っていた「おわん」だった。「いいよ」と保育者が言うと、嬉しそうにおわんを使用し、ページの初めから呟きながらやり始めた。底の部分がコップの役2倍あるおわんに水をあてた瞬間水のやねが周りの子ども達を巻き込むほど広がった、Tさんは「ねえ、あてるところが大きいと、いっぱいになって濡れちゃうからやめて」と言っていた。その後、水道を手洗いに使用する幼児が増え、遊びは自然となくなり、本

来使う手洗いをを行う子が増えていった。また、この数日後、この経験をした数名が再びこの経験を思い出し行うことで、水道周りが水浸しになっていることもあった。

図9:絵本と同じものや同じことをページに沿って実際に行ってみる



考察

毎月、子どもたちが定期購読している月刊誌「こどものとも」の一つに『じゃぐちをあけると』（ちいさなかがくのとも発行）の絵本があり、その内容に沿った経験を担任と共に楽しんだ事例である。

水に興味があるところから、実際に水遊びに参加していない子でも絵本が好きな子はその絵本から世界を広げられるのではないかといった思いから、このほかにも『かいちゅうでんとう』や活動に沿った内容の絵本を用意した。水道の蛇口が似た形状だったこと、絵本が好きな子ども達だったことから今回の事例は楽しんで参加している様子が多かった。

また、中には本当に水道で遊んでもいいのか。といった疑問もあったようだった。その不安に関しては、保育者が実際に見本として見せ、一緒に楽しみ絵本を読みながらその場で共感し進めることで安心感につながり、さらにワクワクとした気持ちや、やってみようといった関心につながられたのではないだろうかと捉えている。

そして、その後に子ども自身が再び水道の蛇口へ花瓶を入れ、水を噴水状態にしていた。この事例からこの時には絵本の内容では書かれていない「花瓶を蛇口へ差し込んでみる」といった行為はどのように考え、成り立ったのだろうか。と、職員で深めてみた。

花瓶に入った花の水を変えるとといった目的で水道へいき、花瓶の古い水を捨て花瓶を洗っている当初は、当該児自身も床が水浸しになることを予測はしていなかったと思われる。「花瓶を水道の先に入れるとどうなるのか」そこには、好奇心だけがあっただけなのではないか。

しかし、当該児なりの過去の経験から、水の流れに対し「何か違った反応があるのではないか」「なんだろう」といった感心の気持ちがヒラメキとして行動へ移り、結果「なんだろう」の先の探求や知りたいといった興味関心につながり、深めた結果が水浸しの床になったのではないか。

今回のような大人からすると一見困る行動や悪戯であっても、子どもにとってワクワクとした気持ちこそが原動力となって行動に移っていることは日々の中で多いのではないかと推測される。よって、このような大人の子測のつかない、または大人は予測が付くからこそ避けてしまう行為こそ、子どもにとっての好奇心であり、子ども自身から出たアイディア、発想、展開こそ、今後も大切にしていきたい。と感じた。

そして、その様子を見守る周りの子どもたちや当該児のキラキラとした目の輝きは「やりたい!」「楽しい!」といった反応そのものであった事は忘れずに記しておきたい。このように、大人の捉え方は、そのときの捉え方により応にも否にも捉え方が変わる欠かせないものだとこの事例より改めて感じられた。

初めに一緒に絵本を読み水道の蛇口をひねり楽しんだ大人の存在があったからこそ、今回このような楽しいワクワクとした時間と出会えたのだ。ひらめいた発想を一人一人が十分に発揮でき、体験経験できる人的、物的環境は、こうした経験に必要な不可欠な要素だということができる。

事例5

「ひかり」(職員：小林、加藤、木本、三枝木) 1歳児～5歳児対象

【5-1】Kさんと『ひかり』(2018年9月) 1歳児Kさん

～ 『ひかり』との出会い ～

天気の良い昼下がり、窓からの陽射しに気が付いた1歳児Kさんは、光と影の存在に初めて出会った。日当たりがよく、全面が窓ガラスの保育室は、時間帯により太陽の日差しが差し込み、至る所へ光と影があり、日差しによりゆっくりと床へ影と光を作っている。日中は散歩へ行っているため、こうした光と影に室内で出会うのはこの日が初めてだった。

午睡後室内にて遊んでいると初めに床の「ひかり」に気が付いたKさんは、じっとその光を見つけていた。しばらくして、次第に興味を持ったのか今度は触って取れないかといった様子で床の「ひかり」に対し手指を使い取ろうと触る。(図11)

中々取り出せないことがわかると今度は自分の足を使い踏もうとする。(図12)

キラキラと光る太陽の反射によって、揺れる模様を最初は不思議そうに見つめていたが、次第に手を差し出し…触ると影になってその模様が消えてしまうことに興味を持っていた。

色によって光の色が変わる事に気が付き、「これはどうかな…?」と真剣な表情で、今度はお気に入りの絵本を持ち出し、光へ入れてみるとどうなるかなどと遊びの世界が広がっていった。

光をつかもうとする姿や、床にも光がさしている事に気が付き、次々と追いかけて発見する喜びの笑顔は、何よりもキラキラと輝いていた。

図10:触ってみる



図11:光に気が付き、光に触れ、光を掴もうとする



図12:光を「踏んでみたらどうなるだろう」と試行錯誤している様子

考察

1歳児Kさんにとって「光」の存在に初めて気が付き、「なんだろう」と触ってみようと一步踏み出せたことは、とても大きな出来事であり、ドキドキとした感情と向き合い手を伸ばした瞬間に新しい扉があき、新しい世界が広がったと捉えられる。

初めに光に手を伸ばし、その光をつかもうとしたときには、「なぜつかめないのだろうか」と、本児なりに何度もトライしていた。夢中で握ろうと「ひかり」をみつければ、親指や人差し指でつかむ動作を繰り返しを経験した結果、光はつかめないものだと思ったようだった。納得するまで行っていた。

次に、では、どのようにしたら捕まるのか（触れられるのか）を考えていた。

窓からの日差しによる「ひかり」は時間によって姿を見せたり、見えなくなったりと自然の現象により変化をもたらす。

Kさんは、毎日過ごしている保育室だからこそ、その現象に気が付き、疑問をもちKさんなりに「どうしたらその光を手にすることができるか」を考え、自然現象からなる偶然の「ひかり」との出会いとその刺激を楽しんでいたようだった。

そして、その自然現象に疑問をもち、自分の身体を使って「つかむ、踏む、つまむ」などチャレンジしていたことに保育士も気が付き、そっと見守るようにしていたが、この気づきを身近な保育者が共感し本児の興味関心をさりげなく大切にしてきたことから、Kさんの興味関心の深みが広がっていったのだと考えられる。

「大人だと気にも留めない当たり前のことでも、小さな変化や不思議に気が付き、日々の中で見つけていく楽しさに触れ、その気持ちを共有することが出来、ほっこりとした時間でした。」と見守っていた保育者はその様子を保護者へ伝えていた。

【5-2】Kさんと『ひかり』（2020年3月）2歳児Kさん

～光を通して友達という共感できる仲間との出会い～

・ジュエル積み木を積み重ねて遊んでいる乳児を見守っていた保育者が太陽の光により棚に反射した光とを見つけ、「すごい！」と反応したことにより、それを聞いていた双子のKさん、Sさんが「え？なにになに？」と興味を持ち近くに来た。子ども達は何だろうと反応していたので、保育者は詳しい事は話さずに側で会話を聞いていた。KAさんが「ズボンにはキラキラが無いけれど床にあった」と気が付き、「なんでー」と不思議そうにしていた。

（図14）子ども同士で何となく話し合っており、でも思うような答えは見つからなかったようで少しずつ飽きて来てしまっていた。保育者がジュエル積み木を高く積み上げていると、同じように積み木を積み上げるYさん、双子のKさん、Sさん、Kさん。高く積み上がった頃、色々な所に『キラキラ』（※光の反射による色の様子を表現しています）が出てきていた。ズボンにキラキラを反射させて楽しんでいたSAさんとKさんも「やりたい！」と興味を持ち参加していた。この光の様子に興味関心を持ち、作る向き、高さ等で反射せず不思議そうにする子ども達。太陽や光の話はせずにはいたが、それでも自分達で考えて遊んでいた。

さりげなく黒い画用紙を用意してみると反射した光が見やすくなり喜んでいた。（図15）

Sさんも他児と同じように遊んでいたが、角度によって光の大きさが変わるのが分かったようで「大きくなったよ」と教えてくれた。

陽が落ちると段々反射しなくなり「あれ無くなっちゃった」と残念そうな子ども達。なんでだろうと質問を投げかけると「わかんない」と言われた。

そこで、「難しいだろう」と思ったが、細かく説明をした。「分からないまま放置するよりも説明する事でなにか

疑問が産まれるかなと思った」という担任の思いがそこにはあった。

K Aさんが「光なら電気があるよ」と言い、保育者が「いまキラキラある？」と話す、「ない」と返答があった。

「あしたもお部屋の中でやってみようか」となり次の日の日中は懐中電灯を使って、夕方はまた太陽を使って遊びを展開した。しかし、懐中電灯はあまり光らずすぐに飽きていた。

・Kさんは最初皆が気付き始めた頃は別の遊びをしていた。K Aさんがズボンに反射させた様子を見て隣に座り始めた。最初は太陽と反対にジュエル積み木を向けていたため、本人の望むようには光らず、Tさんを見て同じようにやっていた。

光る事が分かった後自分で画用紙を取ってそこに光らせ始め、光の大きさに気が付いた。

図14:ズボンのひかりに気が付き、友達と共有する

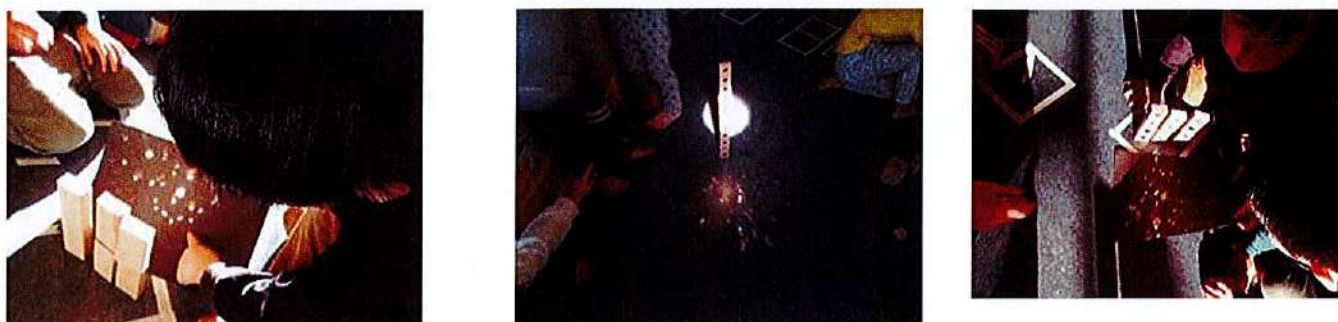


図15:画用紙に反射させる

考察

この事例では、1歳児の時に初めて触れ「光」の存在から進展し、友達との関係が「光」についての興味関心をより深めている。2歳児という発達における友達への関心から「なんだろう」「やってみたい」といった発展につながったと捉えられる。「キラキラ」光る様子に感動し、その感動を共有したいからこそ対話が生まれ、「やってみよう」となるのではないかと感じた。

この事例のきっかけは保育者自身の驚き、感動の言葉をきっかけに発展しているが、1歳児の時との違いはその後の遊びの発展にある。1歳児では、光の存在に自らが気が付き、不思議を感じることで興味関心を持ち、つかもうと一人その光に向き合うのだが、2歳児になったKさんは、その不思議さに対し、大人をきっかけに仲間と共感し関心を持つという他者との関わりが、プロセスにとっても大きく関わってきている。そして、最終的には光の大きさを遠近で変えることができるといった光の特性に出会うことができた。

この成長が何よりも一人で発見したことではなく、その背景には友人という他者からの刺激が加わったことも気づきにつながる一歩だったと捉えられる。

自分では気が付かなかった光の角度や表現の言葉なども他者の経験や様子を通して学んでいる。また、大人がさりげなく画用紙を用意した点でもこの活動の発展があったのではないと思われる。興味を持つのか、持たないのかは重要ではなく、色々な素材を用意できる環境、そしてそこに興味を持った時に

乳幼児期における子どもたちは常に発達し前進していく中で、同じ「光」といった存在との出会いであっても、子どもの発達段階に応じて発展の方法は変わっていくことが今回の事例でよくわかった。

また、そのプロセスの中で他者がかかわることで一人だけでは出会えなかった無限の可能性が広がり、新たな発展にもつながって行くことが感じ取れた。

『「共感」は、相手に求めるものではありません。相手に求めた途端、相手を支配しようとする欲求に変わってしまうのです。特に人間は、他人を自分の都合のいいように操作し、その意図に沿って相手が動いてくれた時、その相手を「やさしい」と評価する傾向があります。それは、本当の「やさしさ」と言えるものではありません。そもそも、本当の「やさしさ」とは一体何なのでしょう。それは、「成り立っていること」がわかるようになることです。すなわち、無数につながっている私たちの存在を「そう成り立っている」という「つながり」で見ようとするのです。子どもの頃に自然に関わる体験が大事なものは、その「成り立っていること」を体験的に、直感的にとらえることができるからだと私は考えてきました。自然についての何がしかの知識を得ようとするのではなく、自然の懐に入り、対象とつながり、一体化できたとき、独特の感覚を味わいます。それが「共感」というものの本質であり、「やさしさ」なのです。そして、対象を「知る」ということは対象への「共感」につながっていきます。そして、対象の「いのち」は自分の「いのち」に置き換えられ、自分の存在を問う力になっていくのです。』参考文献：露木 和男(2019)。「やさしさ」の教育 センス・オブ・ワンダーを子どもたちに 東洋館出版社 18、104-105

【5-3】4歳児光を利用して（2020年5月）

1：段ボールの家を作る。穴をあけセロファンを貼り、懐中電灯で照らす。保育者が空けたダンボール箱の穴にセロファンをつけて、最初は園の携帯のライトを照らし、次に懐中電灯で照らしてみた。（図16）

乳児も興味を持ち光を追いかけて触ろうとする様子があった。（図17）

ダンボール箱の中で光が散りばめられるようすに、Tさん「花火みたい！」と興味を持っていた。Hさん懐中電灯やライトを使い影が壁に映るのを見ていた。（図18）（図19）

2：ダンボールハウスの中にトレース台を設置してみた。手をかざす仕草をする子が多かった。

- ・Sさん→トレース台をじっくりかえして裏を確認していた。
- ・Tさん→トレース台の真上にあった天蓋を見つめていた。（なにか映るかな？と確認??）

トレース台の端からも光が出ていることに気づいた。

持ち上げて、ダンボールハウス内にかざしていた。

また、iPhoneのライトを手にして、トレース台にかざすと、「ほら！火だよ！」「あついでよ！」など、体験と経験からの言葉が発せられた。ダンボールハウス内におままごとのおもちゃを持ち込んだ子がいたためか、食材のおもちゃが落ちており、IさんとTさんが、その食材をトレース台に乗せてパーベキューに見立てた。「あちち！」「もうやけた??」と対話がうまれていた。そして、保育者が色水のペットボトルをパーベキューの食材に足してみたところ、Iさんから「ジュースだよ。冷蔵庫に入れとくね」との会話が生まれた。しばらく遊んでいると、「あ！海！」と、たまたま足元にあった絵本バッグの紙のシワに懐中電灯の光が当たりダンボールハウス内に揺

らめいた光が映った。「エビだ！！」と反応があった。今度はその絵本バッグを直接懐中電灯で照らしてみても、ダンボールハウス内に影が映った。紐の部分がエビに見えたようでその比喻をしていたようだった。Kさん「えびどこ?」「えびみたい?」と、影に気づかず、絵本バッグの中を直接のぞくが、わからないようだった。すると、Tさんから「ちがうよ!」「こっち」と投げかけがあった。しかし、この時には影に気が付かず共感できることはそんなときにはできなかった。

Mさん一懐中電灯の光を赤い色水にむけて「オレンジになるよ!」と驚きを言葉にして表現する。すると、Sさんが「見せて!ほんとだ」と関心を持つ

図16:携帯電話のライトで照らす

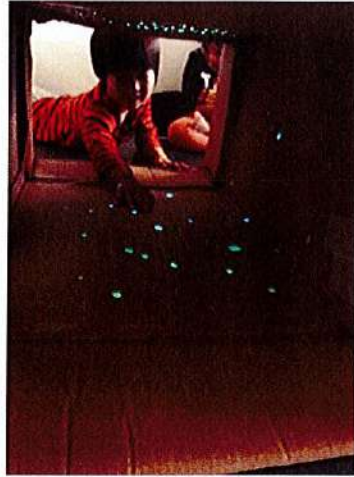


図17:乳児も興味持つ

図18:花火と表現



図19:壁に映る光

図20:当日のドキュメンテーション



図21:色のついたペットボトルにも光をあてる



図 2 2 : 実際の様子の記録

5/29 (金)
 先日とは別のダンボールハウスの中に
 LEDライトを
 ぶら下げる。
 (光が当たるとより活用は必ず)

6/1 (月)
 トレース台が来た。
 ダンボールハウスの中に設置。
 手を動かして光が動く。
 トレース台の裏にあって天がいっぱい見えた。
 下にLEDライトをぶら下げてみた。
 暗がりから光が当たることに気付いた。
 ... 光が上がる
 ... ダンボールハウス内に設置した。

5/20 (火)
 仮の箱が余った
 ↓
 ① ダンボールを連続したり、
 穴をあけて
 モーターで回した
 ↓
 ② 知恵袋では以前より
 懐中電灯の光がセロファンに
 当たるとの光が
 透るという (去年度)
 ↓
 ③ 懐中電灯の
 出し入れ。

④ 光が
 ダンボールの箱の中
 飛び回っているのを見て
 Tさん「花火みたい!」

⑤ Hくん
 懐中電灯の光を
 動かして LEDライト
 が見えた。

部屋をくまなくして、
 非常時用の
 ライトも活用
 したい。

光の
 動き

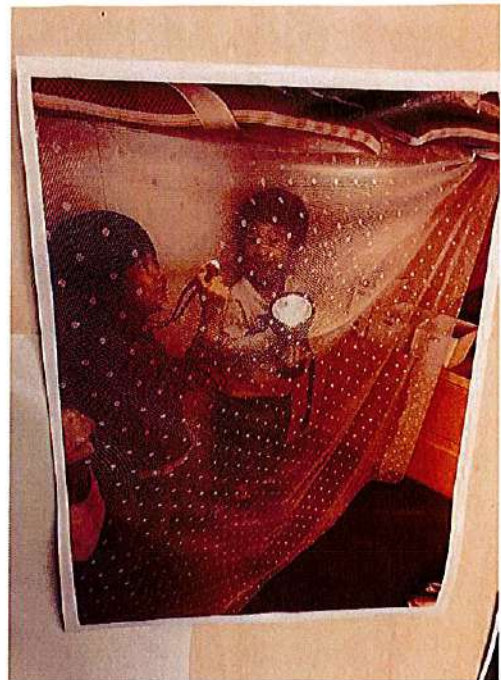
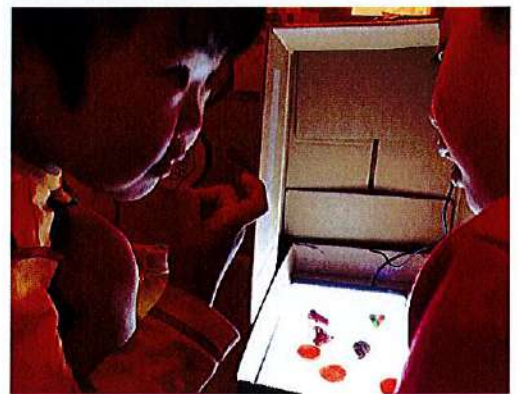


図 23 : ひかり遊びの延長

図 2 4 : トレース台のひかり遊び



考察

この活動は、大きな段ボールから始まった一つの活動だった。
 コロナウィルスが蔓延する中、異年齢での保育を行いその中で室内でいかに楽しく体を動かすか。職員が考えた一つの方法である。担任不在であり、異年齢で過ごすうえで落ち着いて個の時間を取りたいと思う子に、大きな段ボールの箱を用意することで気持ちの切り替えや落ち着きをもって過ごせるのではないかといった配慮から段ボールが保育の中に登場した。そこへ、ガムテープでくっつけたり切ったりといった行為が行われ、同時にカラーセロファンがあったことで活動が発展していった。
 たまたま暗くて付けた iPhone のライト (各クラスで記録用に配給されている携帯電話) から懐中電灯へと発展し、懐中電灯から照らした対象物の光へと興味関心が移行していった。
 その活動は刺激的で、感動的だったのかその日一日に限らず、しばらく『懐中電灯』の遊びは続いていた。
 最初は職員の携帯のライトから始まった遊びだったが、非常用にある懐中電灯へと興味移行し、手のひらサイズの懐中電灯や大きな懐中電灯から遊びの展開も変わってきたように思える。子どもたちの中で普段の生活で触れられるものではないものが最初の興味関心であり、光を使うことで影の大小に気が付いたり、角度にきがついたりと色々な気づきにつながったようだった。この時に当初かかわっていたのは幼児の担任ではなく乳児の担任や主任、フリーの保育士であった。その様子を幼児の担任へ引継ぎ様子を伝えていったことでこの段ボールハウスは壊されることなく子どもの遊びへと発展していった。

興味関心を職員も持たなければただの遊びとして一時的なもので終了していたものだが、その後子どもと共に興味を持った「ひかりとかげ」「ひかりと色」について探求していった様子が(図19)記録からも伝わっており(図22)担任だけでなく、他クラスも巻き込んで行っていたことも伝わってくる。その一つにトレース台がある。より子どもたちに光との出会いを楽しめるものはないかと探求中で園長が用意してくれたものだった。(図24)このように、クラスの垣根を超え色々な子どもたちの変化や楽しむその姿を今回のコロナの影響もあり多数の大人がかかわることでその様子を共有し、対話の中で大人もいろいろなアイデアが生まれ子どもの遊びの保証もできていたのではないかと考える。

事例6

「ひかりの探検」(職員：三枝木) 4歳児～5歳児対象

【6-1】「シンクに反射させてみよう」～水の泡がでてきた!～(2020年5月25日)

・懐中電灯の光を手にするると暗い部屋探しを「探検」といい、5歳児Kさん4歳児HさんIさんの三名が首にLEDライトをかけ探検を始めた。壁や洗濯機に光を当て、一通り光と影の姿を楽しんだ後に、シンクに映すとセロファンの色が映しだされピンクの色がシンクにつくということに気が付いた5歳児Kさんは水を出し、さらにシンクに光が反映し動き揺れていることに着目した。

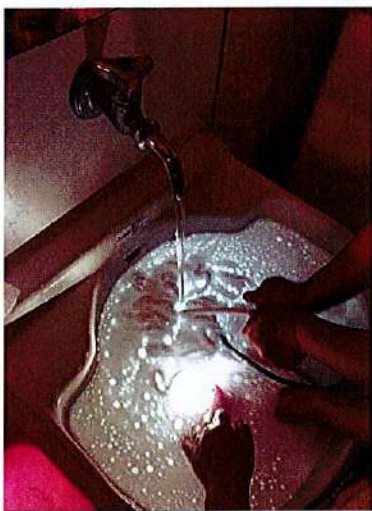
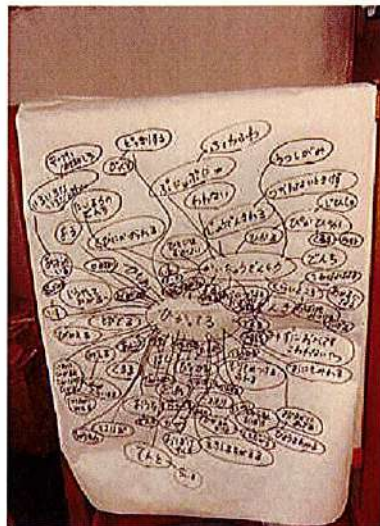


図25：泡とシンク

そこから、水の勢いで出る気泡を「粉」と表現し、なぜ、粉ができてきたのかなど疑問をぶつけあい、会話を楽しんでいた。次第に水の中にできる気泡(泡)と石鹸の泡の共通点に気が付きIさんは懐中電灯を水面に入れると気泡が白く光る事に気が付き、その様子を他児に共有しようと「みてみて何だか白いよ!」と誘う。それを見ていたIさんは、泡の手洗いのせっけんをシンクの中へ入れる。そして、その泡を入れたシンクの中に手を入れ泡立つ様子を「モグラの穴みたい」とKさんは自分の発想を共有する。泡を増やすたびに泡が盛り上げる様子に興奮している。



図26：話し合いながら書き足



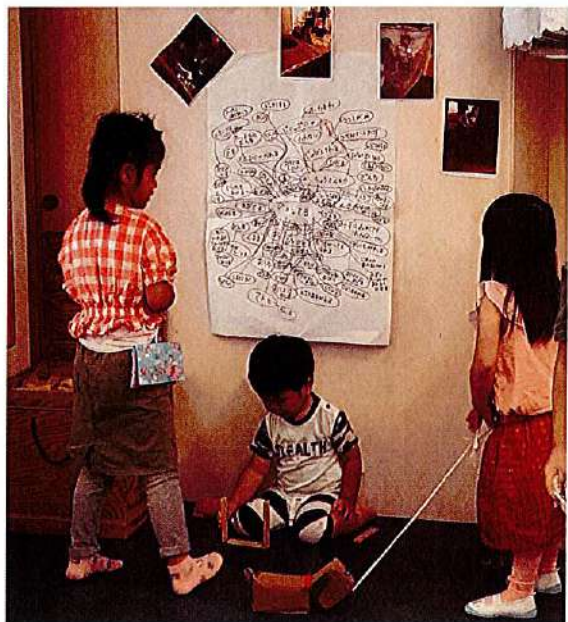
す



図27：アンコウを実際に見せる



図28：コーナを作った後、お互いに言葉で伝える。3歳児が聞く



に言葉で伝える



図29：新たな言葉を赤く書き入れる

このようなひかりの活動をひと通り楽しんだのち、幼児4、5歳児のサークルタイムで「ひかり」について話し合いを行う。

経験した「ひかっている」から連想される言葉を書き出す。一人一人が思いを発言するが圧倒的に「懐中電灯」についての発想が多かった。(図：26)

夏祭りのお祭りの行事もあり、ランプを制作している子も多かったからかライトに関する意見も多い中、自然物の発想へも発展し、他児の意見を聞きその言葉からの発想もあった。

中には疑問も追加された。「あんこう」という魚が出てきたときには、どんな魚か実際に図巻を持参し見せ合う様子もあった(図：27)。

この話し合いは、参加したい子のみが参加し当初は10名から始めたが40分ほど話が途切れずに続いていた。途中から参加してきた子や聞くことで参加してきた子もいた。

この話し合い後、このWebマップを貼るとそこから話が広がる様子も見られた。後に出てきた意見は赤字で書き足すなど工夫をし、その後も子どもの中で「ひかり」について、関心が続いていけるようにした。

中には、「水が光るのはなんでかな…」といった疑問や「電気がない時にはどうしていたのか」「恐竜の時はどうしていたのか」などもでた。そして、「お母さんにきいたら、『反射』っていうんだって」と家庭での会話も聞かれた。数日間コーナとして掲示をしておくことで、遊びの時などに話し合いに参加していなかった3歳児も5歳児に「これ知ってる？」と疑問を投げかけたり興味を持つ様子が見られた。(図：28)

考察

今回のこの事例では、光に関する事例から子どもたち自身が自分で光の中から始まる世界を楽しんできたように思える。理由としては、探検から始まった事例だったが「水」という物質が光と合わさった時に子どもたち自身から発想した内容や行動があり、それを共有する大人の姿があった。

どうなるのか大人でもわからない展開を子どもたちは着々と進めていく勇気があり、その様子に周りにいる保育士は困るのではなく戸惑いはありながらも同じようにワクワクしながら喜んでた。

また、大人があらかじめ作成した「ひかり」に関するウェブマップと子どもが実際に作成したウェブマップとでは明らかな差があるように感じた。(図26)

子どもたちにとって『光っている』ということが光に関するキーワードであり、そこから多くの答えは『懐中電灯』だった。すなわち半数以上の子が経験したであろうこの活動は、子どもにとって知識の一つとなり経験として残っているということが分かった。このように子どもたちは楽しんだこと、実体験で経験したことにより発想や発言につながるのだなということが改めて可視化され再認識できた。(図29) 45分以上にわたる話し合いでは発言する子ばかりではなく、他児の発言している様子を楽しむ様子もあった。決して強制はしていなかったが、自ら選んで45分の間一度も席を立たず、発言もせずにはいた子もいたことは事実であり、その後の活動へこの話し合いがきっかけで興味を持ち参加していたことも記しておきたい。このように子どもたちが興味関心を持つことの種を色々な所に撒いておくことも一つであり、その時々 の出来事や事象に真摯に向き合い大人も一緒にワクワク楽しむことが相互効果となっていくことが分かった。

【6-2】6-1の事例を通して職員で振り返り

この光を探検する様子を職員全員で下記の通り共有した。

R2年6月26日 職員会議配布 参考資料

1. 前回の「ひかり」の動画をみて、あらためてのふりかえりする
2. 今のクラスでは、どのような興味があるか(各担任同士)
3. 今後の活動でどのような発展、楽しみができるか(フィッシュボーン 特性要因図)
4. 今後について

1. 前回の「ひかり」の動画をみて、あらためてのふりかえりする

各自の気づき(各自動画を見て気づきを書き出す)5月29日職員会議

- ・Kさんが「粉」と表現していた
- ・動画の中でKさんが「あわが飛ぶ(跳ねる)」と言っているがどういう感じなのかな?とみてみたくなった
- ・子どもたちみずから「不思議」に気づき知ろうとし、「疑問」を抱いて、楽しんでいる様子は、目を輝かせ人生の中でとても貴重な時間だと思う
- ・Kさん泡を入れたら、手で混ぜ混ぜし始めた。混ぜると泡が増えると思って混ぜているかそれとも泡の感触が楽しくて触っているのか
- ・水の中の白い粉を子どもなりに泡だと思ったのかな
- ・Hさんがプラスチックは壊れない=この概念はどこからきたのか
- ・「光ができるんだらうね」等の言葉がけをすれば「光の動きや変化」だけではなく、「光の元」「そもそも光って?」等幅が広がりそうでネタが付きなさそう
- ・「光の当て方」を楽しむだけでなく光の発生源にも着目している。その点から「どうやったら子どもたちみずから「不思議」に気づき知ろうとし、「疑問」を抱いて楽しんでいる様子は目を輝かせ人生の中でとても貴重な時間だと思う。

上記のように、動画を見て実際にそれぞれが場面の共有を行い意見交換をした。

そのうえで、計画と見直しや振り返りの大切さを改めて職員で感じる。

2. 今のクラスでは、どのような興味があるか各担任同士話し合いを行った。(図28)

3. 今後の活動でどのような発展、楽しみができるか（フィッ

シュボーン 特性要因図）（図29）

各クラス担任（1歳児、2歳児、幼児、調理）がそれぞれクラスで行っていることを整理し振り返る。そして、次回の目標を立てていく。

図28： PDCAに基づく考え方

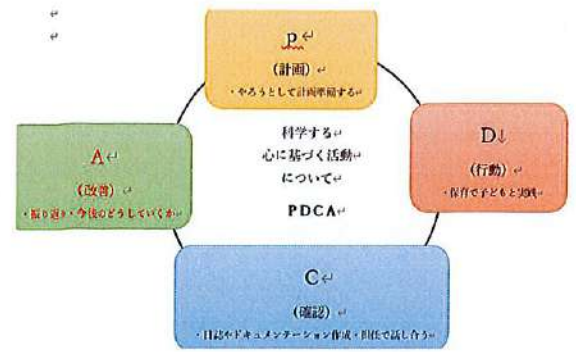
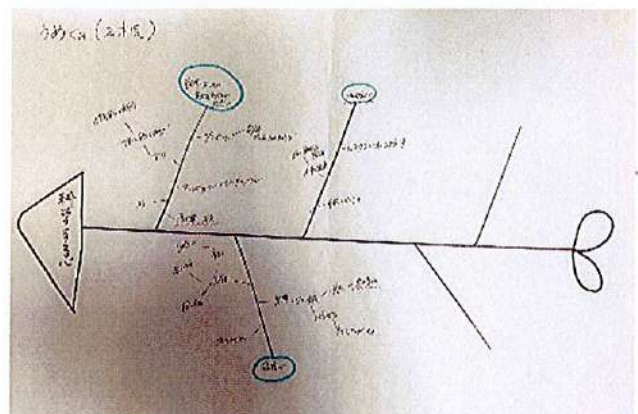
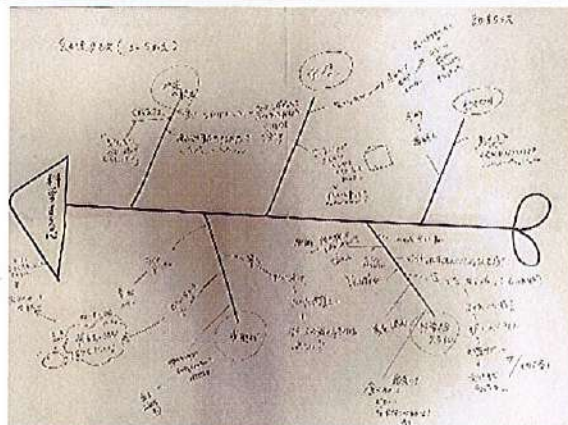
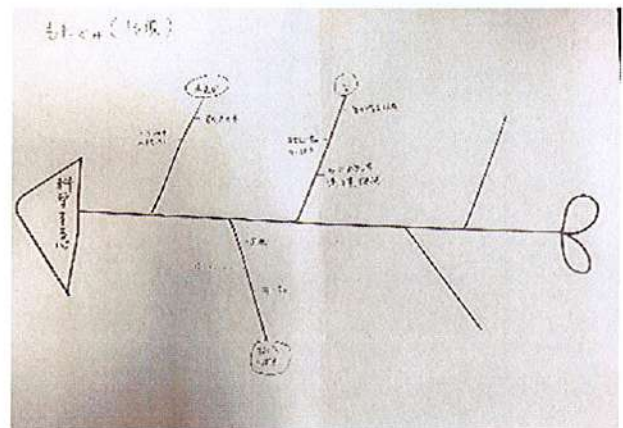
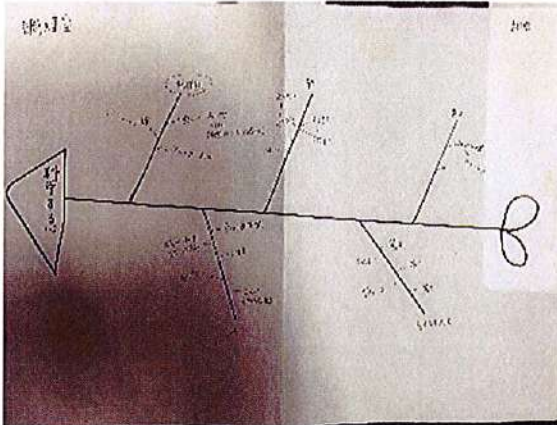


図29:今のクラスでは、どのような興味があるか



4. 考察に基づく課題と今後の方向性や計画

この度、新型コロナウイルスの影響を受け、社会的な改革や人との距離を考えていかなければならない中、いま私たちにできることは何か。と考える機会や時間が多くあった。

そして、その環境下で保育を行うことは全世界の保育業界で共通していることであつたのではないだろうか。

その中で、精一杯考え今回発信として行ったことがひとつのきっかけになり、自然と「科学に基づく心動かされる活動の経験」へとつながった。その一つに、法人として定期的に行っていた「オンライン研修」を通し、法人内での画面越しでの交流や学びができることを知り、職員がそれぞれ経験できたことは大きな刺激の一つとなった。その経験を生かし、「こんなこと、やってみようよ」「〇〇ちゃんは△△ならできそうじゃない？」など、様々な年齢の職員間でも担当を越えて対話が生まれた。

コロナ禍で毎日子どもたちに会えない中、なにかできることはないか。と考える始めたインターネット通信を通じた遊びの提案や動画を使つての科学実験などでは、保護者支援も含め登園している子も自粛している子も同時に同じ経験を共有し行うことができた。「こんなことをしたらドキドキする」「楽しい発見になるのではないか」

など、保育者がきっかけになって始めたことが最初は多々あった。

本来は、「質の高い保育」を目指し活動の多くは、大人の願いではなく、子ども発信でつながる保育を行い、日々の中で小さな変化に大人がいち早く気が付き、保育を展開することがベストだと思うが、はたして、その流れをスムーズに行い完璧にできていると自信をもっていえる保育者は多くいるのだろうか。と疑問が浮かぶこともある。その時々の子ども一人ひとりの気持ちに寄り添い、すべての子どもたちが満されるような保育は理想であるが、現実には中々難しいものがあり、保育は数字のような完璧な答えや正解がないがゆえ、情報はあっても日々の保育の中で現実にするには難しく、職員によっては子どもたちの思いを理解しているからこそ、どうしたらいいのかと自分の苦手意識により戸惑うこともある。

自由というのはその時その時に臨機応変に対応しなければならず、その力量や器量や技量は保育者それぞれであり、「質の高い保育」を目指して「達成」していくといった目標では、返って目標を見失いやすくなってしまわないかと捉えている。「質の高さ」を求めるが故、かえって保育を子どもと一緒に楽しめずに一歩踏み出せずにいることがあると以前から感じていたため、今回はこの「科学する心」に応募するにあたり、もっと保育を大人自身が柔軟に楽しむためにはどうしたらよいかといった視点から考えた。

本園では、その時どきの子どもたちの心の動きの一瞬を取り逃さないためにも、まず子どもの身近にいる大人の保育者が「楽しい」「ワクワク」を感じる必要があると考え「ワクワクすること」とはなんだろう。「楽しんで保育をするってどんなことだろう」といった目標を昨年度目標として行ってきた。

今年度は、その一歩先を進みワクワクすることを行いながらも「いろいろな多様性を受け入れ保育を楽しみ対話すること」を目標に行っている。

今回のこのプログラムに応募するにあたり、色々な人の意見を聞いたり、同じ場面を共有しても人によって感じるものが違うと知ったり多様性を知る良い経験の一つとなった。

事例として紹介してきた一つ一つのきっかけは大人の発信もあったが、その後は子どもの探求心に寄り添って展開していくにはどうしたらよいかとその都度職員で考え行ってきた。

決して強制ではなく保育者が一人一人の思いや気持ちに寄り添い、子どもの科学する心に気が付きその芯にある、「なんだろう」「楽しい」「わくわく」を共感することで発展してきたことが多い。

そのうえで、今後の課題の一つとして、よりよくしていくために「子ども発信」「子どもの主体性とは…」といった課題があげられる。より子ども発信で行うことを大切にしていくために、日々子どもがさりげなくいった一言へも大人が気が付けるような保育環境、また職員同士の対話を大切に、みんなで子どもの状況やつぶやき思いに気が付いて共感していくことが大切であると考えている。

また、子ども発信であり、日々の何気ないコマからのつながる保育を実践していくには、大人自身が「できた」「できてない」といった結果を重視する捉え方でなく、失敗を恐れず工程や過程をしっかりと見ていくという覚悟が必要となる。

大人が当初予定していたものとやり方が違っていたり、思っていた順番で行えず間違っていたり、例え結果がうまくいかなくても「大丈夫なんだ」といった何度でも子どもが安心して失敗ができる環境も大人の心の中に用意しておくことが重要だと感じる。そのうえで子どもがのびのびと自分を表現し、失敗とも成功とも出会えたら、今よりも更によりよい人的な環境になるのではないかと考える。

「なんだろう」と探求心を、近くにいる大人自身がその時々の一瞬に気が付き、見逃すことなくいることが大切だということのほか、同じ新鮮さと感動を子どもと共に感じ気持ちを共感し、時間や場所も共有することで、子どもたち自身にある科学する心のきっかけの「これでいいんだ」「こうしてみたらせいこうした」「できた」「自分はこうしてみたい」と、自尊心や承認欲求を満たされ自信をつけて生活していける基盤ができていくのではないかと考えられる。

多様性の一つとして、子どもの思いもよらない意見もまずは認めてみたり、成り立たないことや失敗やうまくいかなかったこともひとつの経験として受け止め、楽しめるようになっていくことが必要だと考えられる。参考文献：露木 和男（2019）、「やさしさ」の教育 センス・オブ・ワンダーを子どもたちに東洋館出版社 18、104-105

と、センスオブ・ワンダーの解説の中でも示しているが、まさにその捉え方、考え方が子どもにとっての安心感となり自己肯定感を育むと考え、子どもたちがより一人一人尊重され、自分は大切に扱われている。と自信にもつながっていくのではないだろうか。

また、経験する勇気を持ち、成功することだけが正解なのではなく、間違えたり失敗したりすることから正解が生まれ、新たな道を見つけられることがある。といったことも心得ておきたい。

挫折やうまくいかないといった経験をより多くできることにより、自分の存在価値が認められ、失敗を恐れずに楽しめる。そして、その失敗は成長にしかならないため、結果、失敗は存在しないと考えられる。

そのためにも近くにいる保育者は勇敢なる子どもたちの「失敗」をする姿を恐れずに見守っていきたい。

子ども達に何かを教えるための保育者ではなく、「失敗はすべて将来の幸せにつながっている」とそっと背中を支えられるように。うまくいくかわからないことに「わくわくしていける」子どもと一緒に楽しむために日々を過ごしていけるように。

また、今後の課題として、大人発信で投げかけることばかりでなく、こどもの生活における子どもの探求心や「この後どうなるのだろう」といった思いに共感、察知し見守れるよう過ごしていきたい。主体的に子どもが活動できることを支えるためには常に子どもを肯定的に見守り、下記のような視点を持つことが大切なのではないかと考える。

『子どもがさりげなく触るモノは一つ一つ丁寧にみることで、その子の思いや意味、こだわり、成長などが見えてきます。子どもがモノとどのように関わっているのか、立ち止まって見てみたいものです。子どもが始めた些細なことと捉えてしまうような出来事には、実際に多くの重要なものや自然との豊かな対話の世界が秘められています。』

参考文献：(2019) 大豆田啓友 “倉橋惣三を旅する21世紀型保育の探求”フレーベル館 80

最後に、毎日私たちに驚きやパワーを与えてくれる子どもたち、子どもたちのために多大なる努力を惜しまず日々行ってくれている仲間の職員、その全体を包み込んでくれている園長に心より感謝を伝えたい。大人自身も「ワクワク」できることは日々の保育の中で欠かせないエッセンスであり、私たちはいつでも子どもと共に学んでいける保育士でありたいと思う。

『子どもがいたずらをしている。

その一生懸命さに引き付けられて止めるのをやめる人。気が付いて止めてみたが、またすぐに始めた。そんなに面白いのか、なるほど、子どもとしてはさぞ面白がるかと、識らず識らず引き付けられて、微笑みながら、叱るのを忘れてる人。』倉橋 惣三 「ひきつけられて」

(研究代表者)三枝木 美歩

(執筆)三枝木 美歩 幼児担任:木田翔 加藤 友美 乳児担任:木本 春圭 遠藤 真夏 小林 佳未